

長野県における慣行田植法の地域性と その成立要因に関する研究

第2報 苗の運搬法について

土 屋 敏 夫
信州大学農学部附属農場

Studies on the Traditional Transplanting Methods of Rice in Nagano Prefecture
II. On the Carrying Methods of Seedlings
Toshio TSUCHIYA

前報¹⁰⁾に引き続き、苗の運搬法について報告する。苗の運搬については、調査資料が少なく、さきの慣行田植法の全国調査^{1,2,3,8)}の際にも実態調査はまとめられず、ただ写真による記録が整理されたのが唯一の資料である。また民俗関係書等には若干の記載はみられるが、その実態を系統的に理解、把握するには資料不足である。

田植機の普及で箱育苗方式に移行したため、従来からの苗の運搬用具類も消滅し、その実態がわからなくなってきている。このような農法の実態を資料として将来へ残すためにも、前回の調査に引き続き補充調査を若干行ってきた。なお調査方法等は前報に示したものと同様である。

結果および考察

1 苗代における運搬

苗取り作業では、次の苗の運搬や植付作業を配慮して、取り苗は直ちに小束に結束される。作業中は結束した苗束をその付近の水面上に浮かべておく。この苗束は、植付作業に移動する直前、また田植の前日に苗取りを行った場合に夕刻作業を打ち切るときに、苗を集めて畦畔の際まで搬送しておくのが普通である。

この運搬法は苗を10～15束集め葉身部をそろえ片手につかみ、同様に両手に苗を提げ、苗代内を往復しながら運搬する。このような手持運搬による手法は、県下で共通した運搬方法である。

しかし苗代面積が大きい場合、あるいは作業者が少ない場合に苗代内を幾回となく往復せねばならず結構な仕事量になる。なおこの作業には田舟（湿田稲刈搬送用）を利用している事例も若干あり、またトタン底をつけた箱（稚蚕用）、桶などを利用して運搬される事例も散見された。

2 苗代から本田までの運搬

1) 運搬用具

(1) 竹製の用具 本田までの苗運搬は、県下ではほとんどが用具を利用した方法があり、多種多様の運搬用具が試用されていた。中でも竹製の用具が多く、竹籠について、県下に

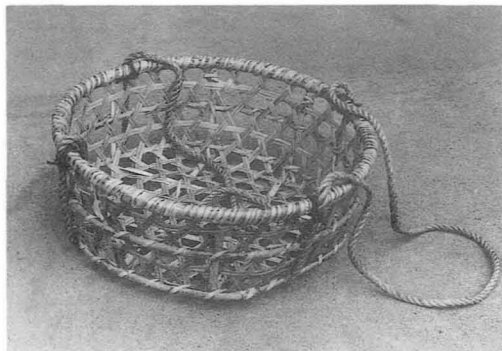
分布していた代表的な種類を調査したものである。なお現場では表中に示したもの以外に採桑、養蚕あるいは生活用具である竹製の籠類や竹箕なども動員され使用されていた。

表-1 苗運搬用の竹籠

No	名 称 (別 名)	材 料 編 成 法	大 き さ (cm)	重量(g) 使用型	用途(主な 運搬物名)	分布地域	製 作 地 (同類産地)
1	苗カゴ	ネマガリダケ 六目編み	口径 60 高さ 20	1,000 肩担型	苗,刈草,堆肥,その他	北信の北部,その他	須賀川
2	カツギザル	ネマガリダケ ザル編み	口径 45 高さ 20	600 肩担型	土砂,堆肥,草,その他	北信,東信	須賀川 (戸隠)
3	越中カゴ	ネマガリダケ 六目編み	長口径 62 短口径 52 高さ 30	1,520 肩担型	苗,刈草,堆肥,収穫物,その他	北信,東信 その他	戸隠
4	ショイカゴ (ガンゴジ)	ネマガリダケ 六目編み	長口径 68 短口径 45 高さ 42	1,800 背負型	収穫物,刈草,苗,その他	北信の西部,中信北山間地	戸隠
5	草刈カゴ	マダケ 六目編み	口径 54 高さ 70	3,450 背負型	刈草,桑,堆肥,その他	南信,中信 東信の一部	飯田 (伊那,松本)
6	ショイビク (ショイカゴ)	マダケ ザル編み	口径 40 高さ 50	1,900 背負型	桑,収穫物,草苗,その他	南信,中信	伊那 (飯田,松本)
7	田植ビク	スズダケ ザル編み	長口径 30 短口径 28 高さ 23	290 腰提型	苗,その他	中信	松本
8	田植ビク	スズダケ ザル編み	口径 21 高さ 25	280 腰提型	苗,桑,種子 その他	南信の伊那,諏訪	伊那
9	田植ビク (コシカゴ)	マダケ アジロ編み	長口径 25 短口径 24 高さ 23	390 腰提型	苗,桑,その他	南信の飯田地方	飯田

主要な苗運搬用具である竹籠について、県下における地域分布をみると、北信地方には北部の苗カゴ、南部の越中カゴが主な用具であり、カツギザルは全域にわたり、わずかながら分布していた。なおショイカゴは長野西部と安曇北部の山間部に使用されていた。東信地方には越中カゴが多く、その他にカツギザル、苗カゴ、一部に草刈カゴも分布している。中信地方には草刈カゴ、ショイビクの他に平坦部では苗カゴも使用されていた。南信地方では草刈カゴ、ショイビクが主な用具であり、肩担型の用具の分布が他地域に比べて少ないようである。

県下における主要な竹細工製品の産地は、ネマガリダケを主材料とした北信の戸隠・須賀川と、マダケを材料とした南信の飯田、マダケとスズダケを材料としている松本・伊那の産地がある。苗運搬用の籠類も主として地元で製作されたものが利用されており、用具の地域分布と関係が深いことがわかった。



1 苗カゴ



2 カツギザル



3 越中カゴ



4 ショイカゴ



5 草刈カゴ



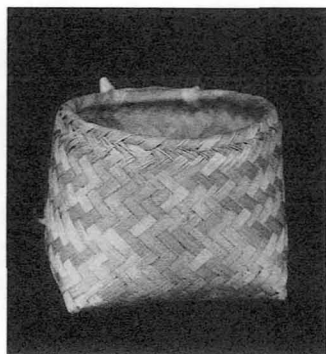
6 ショイビク



7 田植ビク（松本）



8 田植ビク（伊那）



9 田植ビク（飯田）

写真-1 苗運搬用の竹籠

（２） わら製の用具 わらで直径60cm、深さ20～30cmのザル状に編み、釣り縄をつけた肩担型のタツポ⁵⁾（別名、ボテザル、フゴ、ブリ、イジッコ）は、全県下で古くから利用してきた運搬用具であるが、戦後は散見される程度までに急減した。またわら縄で編み両側に担棒をとおした担架（別名、コエモッコ）は、わずかながら各地で使用されていた。しかし縄で編んだ運搬用具のモッコ（畚）は苗が傷むとして直接苗運搬には利用されていなかった。なおその他の用具として、カマス（刈）、炭俵などが使用されていた。

（３） 木製の用具 蔓性の木を材料にして籠状に粗く編み背負板をつけた背負持籠⁶⁾あるいは丸座に編み4本の釣り縄をつけた畚等が山間地で使用されていたが、戦後はほとんどみられなくなった。その他肩担型の肥料桶、空き箱、樽なども苗運搬に使用されていた。

苗の運搬には、古来から手近に得られる材料で農家が自家製作した、わら製または木製の用具が長い間使用されてきた。その後竹製の用具が普及し、竹籠が主要な運搬用具の地位を占めるようになった。竹籠は、水に強く丈夫なこと、水切れがよく軽いこと、形崩れがすくないため運送中に苗を傷めることがないなどが主な原因と考えられる。また竹籠は基本的な運搬用具であり、人力による運搬や車による運搬にも適合した用具である点も見逃せない。

なお、これらの竹籠は、運搬用具として農家では苗運搬だけでなく広く活用されている。したがって各地域で、その運搬物の種類、方法、目的等が異なるため、その他地方独自の籠が成立してきたもので、前述のような地域分布の要因とも考えられる。

2) 苗の搬送準備

苗の搬送に先だって、その準備作業を2つに大別することができる。用具を使用する場合は用具内に苗束を収容する準備作業がある。苗束は葉身部を中心に根を外周に向けて丁寧に積み重ねる。この積み込み方は用具の種類、形状には関係なく、ほとんど同じ手法で実施されていた。これは苗を傷めたり、束の崩れを防ぐための工夫であり、決して雑然と詰め込むようなことはしなかった。

運搬用具を使用しない場合は苗を縄で結束して搬送する方法がある。この方法は縄を十字に敷き、葉身部を中心へ、根を外周に向け、100～120束を円筒状に積み重ね、両端に棧俵を当てて縄で結束する。さらにこれをススキを材料に編んだコモ（菰）で根の周囲を巻き、人か馬の

背で運搬する方法が山間地の一部で行われてきた。

3) 人力による運搬

(1) 背負運搬 作業者が背中に背負って運ぶ方法であり、一般に運搬用具に苗を収容し、それを背負って搬送する。その用具にはショイカゴ、ショイビク、草刈カゴ、あるいは背負持籠、吠などが主に使用されている。なお、このような用具を用いずに、前述したように縄で結束した苗束を2本背負って運ぶ方法も山間地の一部で行われていた。

苗は重く水が垂れるので、作業にあたり背中当て、背負梯子等を使用し、荷縄をかけて運ぶ。ただショイビク、草刈カゴなど背負い紐のあるものはそれを利用するが、苗束を多量に詰めたときなどは別に荷縄を掛けることもある。

背負運搬は平坦部より山間地に分布割合が高い、山間地は坂道で道路事情が悪く他に運搬手段がないため、このような人力による運搬が主力になっている。なおこの方法は比較的遠距離運搬が可能なことも役立っている。

(2) 肩担運搬 荷重を肩に受けて運ぶ方法で、苗の運搬ではこれを次の二つに大別できる。天秤棒の両端に荷重をかけ、中央部を肩で担いで運搬するテンビンカツギ法と、担棒の中央部に荷重を置き両端を肩で担いで運搬するサシニナイ法⁴⁾がある。

運搬用具としては、テンビンカツギ法には苗カゴ、カツギザル、越中カゴ(表-1に示したものより5~6cm浅いものがある)等が使用されている。サシニナイ法には草刈カゴ、越中カゴ、苗カゴ等が使用され、時にはショイビク、吠、空き箱、桶などに十文字に荷縄をかけ二人で担ぎ運搬する。

テンビンカツギ法による運搬は、坂道ではバランスがとりにくく、平坦地の方が分布割合が高い。地域的には、北信、東信地方にテンビンカツギ法が、南信地方にはサシニナイ法による運搬の分布割合が高いように見受けられた。

(3) 手持運搬 この方法は担架を使用した運搬法により代表される。その他には箆、竹籠、箕などに苗束を入れて手持で運ぶ、また苗束30~40束を縄で結束し手に提げて運ぶ方法など、極めて限られた場面での運搬法がある。この方法は手持ちするため長時間の運搬には耐えられず、極めて近距離における運搬に適用されている程度である。

人力による苗の運搬は、古くから行われてきた方法で、狭い農道や畦畔上の運搬など、どのような作業環境にも対応できる苗運搬の基本的な作業法である。そのうち肩担運搬は搬送中苗から出る水が作業者にかからない手法のため、苗運搬における主力の作業法となっている。新潟県の平坦部ではテンビンカツギ法が主力であるとする報告⁹⁾もあるが、本県では車による運搬法が増えてきた関係もあって、テンビンカツギ法とサシニナイ法が基本的な作業法となっている。

4) 車、馬による運搬

(1) 車による運搬 運搬手段として、荷車、リヤカー、一輪車などが苗運搬に利用されている。この方法は車の荷台上に苗を載せて運ぶ方法であるが、苗束を直接荷台上に積み込むことはまれであり、運搬用具の竹籠や箱などに苗束を収容し、それを車で搬送するのが普通である。ただ一輪車では直接苗を積み込んで運ぶのが多い。このように苗束を用具内に収容して搬送するのは、苗の積み降ろしや、搬送中の苗傷みがないこと、作業が簡略で直ぐ本田での畦畔上の運搬にも対応できることなどに因るためと思考される。

この車による運搬の場合は、車の牽引が人力であったため、坂道の少ない平坦部に多く分布していた。なお人力牽引でも肩担、背負運搬によるよりは、車運搬の方が作業的に楽だとして、年々増加してきた。しかし戦後の30年代後半頃からトレーラーや軽自動車の普及によりこれに代わってしまった。

(2) 馬による運搬 この方法は運搬手段に畜力を利用する方法で、県下では馬の背による苗の運搬が、古来から行われてきた。馬の背に荷鞍を装着し、縄で結束した苗束を荷鞍の左右に3本ずつ付け、さらに中荷を1～2本のせる。したがって一駄で700～1,000束分の苗を運ぶ方法である。

例えば、諏訪地方の高冷地で委託苗代が行われていた時代、馬の背による苗運搬が行われてきた歴史的経過もあるように、この方法は長距離運搬には欠くことのできない運搬手段であった。なお一般に山間地では、道路が狭くて坂道が多く、馬の背による運搬が唯一の手段であった。しかしこの方法も戦後急減し、昭和30年代後半にはほとんど見られなくなった。

(3) 荷馬車による運搬 この場合の県下で使用された畜力では、馬が主力であって一部に牛も使用された。荷馬車は県下では「ウンソウ」と呼ばれ、四輪車と二輪車の二つの種類があり、四輪型の分布割合が高かった。なお、今回の調査では荷馬車による苗運搬の分布実態を明らかにすることはできなかったが、県下では南信地方に四輪の荷馬車を保有する農家の割合が高いように見受けられた。

荷馬車による運搬は、遠距離、中距離運搬を問わず、また坂道においても最も高能率で機動的な運搬法であった。苗の運搬法は、前述した車による運搬の場合と同じで、運搬用具に収容した苗を荷台に載る方法で行われている。ただこの運搬法では、道路幅が制限要因になるので、人力による搬送と継続運搬が必要である。

本田までの苗運搬には、運搬用具をはじめ、手段、方法等多種多様であり、今回の調査では、その年次が経過したためにこれらの分布割合まで明らかにできなかった。しかしこれらの運搬手段や方法について、大略の地域差が認められたこと。また同一地域内においても多種多様の手段、方法が混在し運搬作業が展開されている実態のあったことがわかった。

苗運搬における手段や方法は、苗の量、苗代から本田までの運搬、地形や道路事情等の条件と、各農家で保有している運搬用具、手段、労力関係が要因で、多様な運搬法が組み立てられ展開していたものと考えられる。

3 本田における運搬

本田まで運ばれた苗は、植付けるまでの間、薙、薙などで日除けを掛けて苗傷み防止に注意が払われる。さらに3～4時間もかかるときには、苗束を用具から出して広げ、ムレを防ぐこと、根部を水につけるなどの処置がとられている。

本田における苗の運搬は植付作業の一部にもあたるが、これを大別して、(1) 苗束を田面に配る方法、(2) 植手が運ぶ方法に分けられる。図-1は本田における苗の運搬法と植手が運ぶ場合の運搬用具についての分布状態を示したものである。県下では北信、東信地方が田面に苗を配る方法、中信、南信地方が腰に提げた田植ビクに苗を入れ植手が運ぶ方法で行われ、対象的な二地域に分けられる。

1) 田面に苗を配る方法

この方法は、全県下で古くから行われてきたものであり、一般に「苗打ち」と呼ばれている。

この作業はほとんどが畦畔上から植付直前の田面に苗を散布する手法がとられる。苗束を投げるには葉身部を逆手に軽く握み、腕を大きく振る方法で苗を遠くまでとばす。その際に苗束が解けたり、崩れたりしないこと、田面にほぼ均等に配布することが作業の条件である。また散布する苗量の過不足は、植付時に植手が次の苗束をとるため移動したり、植残った苗束を後方に送ったり、植付作業をしばしば中断せねばならず、一区画当たりの苗束の適正量の配置が必要である。なお田植時には人手不足のため、子供がこの作業を担当することがあるが、苗量は主人が指示している。

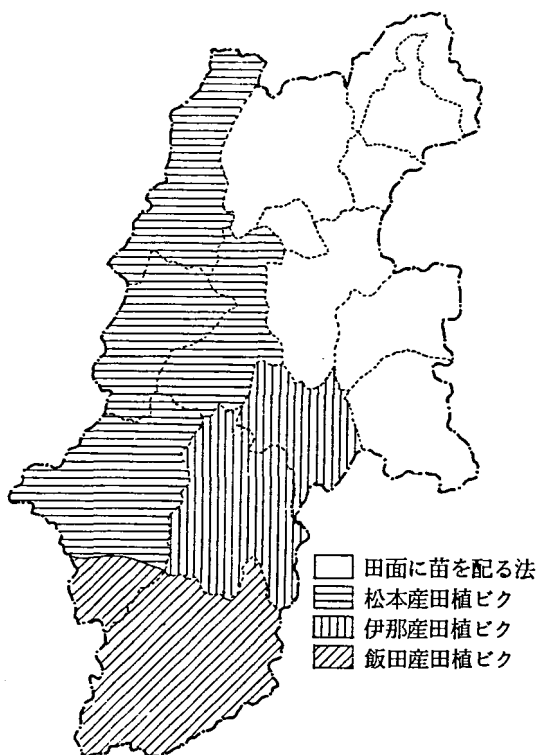


図-1 本田における苗の運搬法と運搬用具の分布
：植手が苗を運ぶ法（運搬用具を示す区域）

2) 植手が運ぶ方法

植付け作業をすすめるとき、植手が苗を持ち運ぶ方法であり、苗束は籠に入れ腰に下げる方法がとられている。一回分の苗の持ち量は15～20束程であるが、普通苗の補給は畦畔上が便利のため、植え付けの一計分、あるいは往復の必要分を持つ。30束以上も腰に提げると、紐が腰に喰い込み、植え付け作業がやりにくいので、最小限の苗を見積もって持つようにしている。

この用具の竹籠を「田植ビク」と呼び、写真-1に示したように、楕円底の松本産、丸底の伊那産、方形底の飯田産の3種によって代表できる。これらの分布は図-1のとおり、中信地方には松本産、南信地方は伊那産の籠が伊那と諏訪地方に分布していた。なお伊那産には、表示しなかったが、マダケのやや粗編みのものがあり、やや重く耐久性は劣るが、安価なため諏

訪地方で多く使用されている。また飯田産のものは飯田下伊那地方に分布していた。このように苗運搬用の腰籠には、専ら竹製の籠が使用されるのは、軽く水に強いこと、丈夫で長時間使用できること、苗束からの水が腰に提げても、体に回らないためと云われている。

本田における苗運搬で、田面に苗を配る方法は、古くから行なわれてきたもので、その成立過程が明らかにできないが、縄植えの時代には県下の全域で行われていた。また植え手が苗を運ぶ方法は、戦中から戦後の頃、中信と南信地方に縄植法に代わって型付植法が導入された時に普及した方法である。

この田面で苗を配る方法が北信と東信地方に分布するのは、従来からの縄植法が主力としてつづけられているためである。また植え手が苗を運ぶ方法は、型付植で田面に付けた植付基準型を投げた苗束で潰さないためにとられた方法である。したがってこれは、植付法が本田における苗運搬法の成立要因であるとする各地の報告^{1,2,7,8)}と本県でも同じ関係が考えられる。

しかし、戦後遅れて型付植法が導入された北信地方では、中南信のように苗運搬法を変えず、田面に苗束を散布する方法で型付植が成立している地域がある。これは苗籠を腰に提げるため、腰が重くなり植付の作業能率が低下するからという理由も理解できる。なお型付植の導入初期は正条植にこだわったが、戦後は並木植が増加してきた。北信では初期から並木植が多く、並木植の場合が田面の植付型が苗束を散布し、多少潰れても支障がないためではないかと考えられる。

以上、苗の運搬には苗代内、本田内および苗代から本田までの運搬の3つの作業場面があり、それぞれ異なった運搬法が成立している。苗代における運搬法は県下同じであり、本田の場合は北信と東信が田面に苗を配る方法、中信と南信では植手が運ぶ方法であり、いずれの場合もほぼ画一的な運搬法がとられている。しかし苗代から本田までの運搬法は、前述したように運搬用具、運搬手段、方法等多種多様であり、また同一地域内においても多様な運搬法が展開されているのが実態である。

苗は重く、かさばること、取扱中に水が垂れること、生物で損傷し易いことなど他の運搬物と異なった運搬条件がある。また運搬には運搬距離、苗量、道路状態等が関係するため、多様な用具、手段、方法が工夫され成立してきたものと考えられる。苗運搬には、畦畔上の運搬などを伴うため、肩担運搬など人力による運搬方法が基本になる。したがって竹籠の用具が普及した要因でもあり、また車による運搬が増大したことで、肩担運搬との継続作業が増大していることも見過ごせない。

さらに、上述のような運搬用具、手段、方法を組み合わせることで、作業能率は別として、各農家、各地域で多様な運搬法が展開できるものであり、苗の運搬法は、このような作業内容をもつものと考えられる。

しかし、この苗の運搬法の実態調査を通して、取り苗は運搬のために小束に結束されること、運搬用具への苗の収容方法、結束方法などの工夫。さらに運搬の前後、運送中において、日除け、風除け、また長時間にわたる苗の重ね置、苗傷み、束崩れなど、苗の活着と植付作業能率を配慮した注意と工夫が常になされている点を見落としてはならない。

摘 要

- 1) 長野県における慣行田植法について調査し、前報の苗取り法に引き続き苗の運搬法について報告する。
- 2) 苗の運搬法は、苗代と本田および苗代から本田までの運搬の三つの作業場面があり、それぞれ異なった運搬法が成立している。
- 3) 苗代における苗運搬は、苗束を手持搬送する方法が普通で全県同じ手法で行われていた。
- 4) 本田までの運搬は、運搬用具に苗束を収容し運送する方法で行われている。その用具は多種多様であるが、竹籠の使用割合が最も高い。なお竹籠について種類形状、県内の分布状態を調査した(表-1)。
- 5) 本田までの苗運搬は、人力による方法、車、馬、荷馬車など多様な手段方法で行われており、これらは主に肩担運搬法を基本作業として成立している。
- 6) 本田における苗運搬は、田面に苗を配る方法が北信と東信に、植え手が持ち運ぶ方法が中信と南信地方に対象的に分布している。この運搬法の成立要因には植付法が最も関与していると考えられる。

引 用 文 献

- 1) 井口厚信(1978)香川・徳島両県における慣行田植法の地域性とその成立要因に関する研究, 第一報 苗取りおよび田植法について, 農作業研究 No.33; 1~7.
- 2) 慣行田植法研究会(1978)慣行田植法, 一その地域性と成立要因一.
- 3) 松崎昭夫・竹村三郎・坂井直樹・小松洋吉・高塚清一・角田公正(1977)山梨県における慣行田植法の成立に関する研究, 第一報 分布割合からみた植付け方法の類型区分, 農作業研究 No.29; 30~35.
- 4) 宮本馨太郎(1973)民具入門, 慶友社.
- 5) 長野県教育委員会編(1969)信州の民俗, 第一法規.
- 6) 小谷村教育委員会(1972)小谷の民俗, 柳沢書店(池田町).
- 7) 小畑晃男(1977)和歌山県における慣行田植法の地域性とその成立要因に関する研究, 農作業研究 No.29; 24~29.
- 8) 佐藤徳雄・酒井博・渡辺正・東海林仲之助(1977)宮城・福島両県における慣行田植法の地域性とその成立要因に関する研究, 農業研究 No.28; 58~65.
- 9) 進藤 隆(1976)新潟県における慣行田植作業の地域性とその成立要因に関する研究, 第2報 苗取り, 苗運搬および植付作業について, 農作業研究 No.27; 8~13.
- 10) 土屋敏夫(1986)長野県における慣行田植法の地域性とその成立要因に関する研究, 第1報 水田の立地条件および苗取り法について, 信州大学農学部 農場報告 No.4; 21~27.